

NO.1
July '86

NEWSLETTER

神戸女学院
女性学
インスティテュート

神戸女学院大学女性学インスティ テュートの成り立ち

女性学インスティテュート発足の経過事情については、池井元研究所所長の書かれた記事がありますので、ここに『めぐみ』75号より転載いたします。

「女性学インスティテュート

大学研究所長 池井望 (1986年3月現在)

昨年4月、AWI (Asian Women's Institute) の呼びかけに答えて本学にも女性学研究機関を設けることになりました。国際的視野をもつこのような女性学研究の在り方は全く画期的なものと言ってよく、時あたかもAWI 10周年記念交換学生受け入れ問題ともからんで、かなり大変な作業でした。結局、先行の東京女子大学の例にならない、大学研究所 (東京女子大では比較文化研究所) の下部組織として本邦第2番目・関西最初の女性学研究所が発足することになりました。

組織の上からは大学研究所長が運営上の世話係となり、渉外の専門家として英文学科・高瀬教授(ディレクター)をおき、デフォレスト館3階「分室」の図書管理を含めた日常の事務処理を黒木さん(教学職員)にお願いすることになりました。」

なお、AWI (Asian Women's Institute) はアジアのキリスト教の9女子大学によって発足し、現在は本学院を含む14の大学が加盟し、本部はパキスタンの Kinnaird College にあります。加盟大学は次のとおりです。

INDIA

Isabella Thoburn College,
Howabagh Women's College
St. Christopher's College of Education,
Women's Christian College,

JAPAN

Tokyo Woman's Christian University,
Kobe College

KOREA

Ewha Womans University,
Seoul Woman's University

LEBANON

Beirut University College,

PAKISTAN

Kinnaird College,

PHILIPPINES

Philippine Women's Institute comprising
Siliman University,
Harris Memorial College,
Northern Christian College

AWI 香港会議

神戸女学院大学女性学インスティテュート発足に先立ち1985年1月21日～31日に、香港においてAWIの会議がありました。下記は高瀬教授の印象記です。

高瀬 ふみ子

AWIでは、昨年1月21日～31日、香港YWCAで、創立10周年記念式典および「21世紀のアジア女性」と題する討論会、学長会議を開催しました。本校から山口光朔教授と私が出席、私は1月20日の祝宴から23日まで参加いたしました。本部に登録した参加者数は55名でしたが、この祝宴には数百名が列席、会長をはじめとする役員のあいさつ、AWI紹介のフィルム、10年間の功労者の表彰等々が真夜中まで続き、2時間の時差をかかえる私には26時間の香港第一夜が、やっと終わりました。

翌21日には、礼拝に引続いて開会式が行われ、新たに神戸女学院大学を含む5校のAWI入会が承認されました。会議は、綿密に計算されたスケジュールで行われました。基本テーマ「21世紀のアジア女性」を3つのサブ・テーマ、「女性と仕事—現代社会におけるアジア女性」、「女性と健康」、「女性と家族」、に分け、夫々の問題提議のスピーチの後で、小グループによる事例討議がありました。問題提議者は、アジアの欧米化、生活の機械化による「ハイテク時代」、進歩に伴う、あらゆる面における既存価値の急激な変化、崩壊を繰り返し、繰り返し、強調。事例討議では、理論的解明よりは、具体的に、ある環境の女性を如何に助けるかについて真剣に話し合い



ました。「女性と仕事」のグループ討議では、3つの実例—(1)日本のある女子大生は、父親が一流商社にコネで就職を世話してくれたが、気がすまない。しかし、自分が何をしたいのかも分からぬ。(2)フィリッピンのある女子大生は、入学した学科が自分に適していないので転科したい。(3)パキスタンのある女子学生は、上級学校へ進学したいが、家族が就職してほしいと言う—をとり上げましたが、第一例を少し話し合っただけで時間切れになりました。あるメンバーが、「父親の横暴」に起因すると断じられました。私は、日本のことですので、「問題はむしろ女子大生にあるのではないか。一流商社に就職するのは至難であり、父親は娘のため苦労したと思う」等と発言したりしました。

食事もお茶の時間も一堂に会して行うプログラムは、討論とともに親睦、意見交流を重視しているように感じられました。AWI会長のDr.Mira Phailbusとお話した時、「大会の運営より準備の方が大変だった。特に食事のメニュー打合せに何度文通したか分からない」と御苦労の内輪話を伺いました。実際、食生活は多様で、素食主義の参加者もあり、英語を解しない給仕に私も漢字で特別料理を注文したこともありました。

私は、「女性と健康」討議まで列席して帰国しましたので、最終的にどのような決議がなされたのか分かりませんが、ある香港からの参加者が、「今迄の討論と、『21世紀のアジア女性』のテーマと、どのような関連があるのですか」と質問した事が印象に残りました。

AWI参加国の旗と人形に囲まれた3日間、私は、アジアの女性が、自らの政治的、社会的、学問的向上を求めて実生活で如何に精力的に活躍しているかを体験いたしました。日本では、男女雇用機会均等法も成立し、女性は一応、平等のタテマエに安住していますが、実際面では、アジア他国の女性程、問題意識をもたず、また、具体的活動においても、遙かに後れをとっているのではないかと感じました。サリーの裾をひるがえしながら世話を下さったパキスタン、インドの実行委員の方々感謝しつつ、筆を置かせていただきます。

AWI (Asian Women's Institute) の交換留学生のプログラム

AWIでは、10周年を記念して、リーダーシップ養成のため、合計9名のAWI加盟のアジアのキリスト教女子大学の学生が、交換留学生として、それぞれ割当てられた国に派遣されました。本学院には、インドのWomen's Christian CollegeからMiss Christine Marleyが1985年12月～1986年6月まで滞在しました。Miss Marleyは英文科の授業を聴講するかたわら、神戸YMCAの日本語クラスや、また世界女子学生会議や婦人国際交流集会などにも参加しました。Miss Marleyは離日にあたって、つぎのようなメッセージを残してくれまし

た。

On behalf of the staff and students of the women's study group at W.C.C., India, I would like to thank the staff and students of the A.W.I. at Kobe College, Japan, for inviting me to spend the last six months with them as an exchange student. I have enjoyed every single moment of my stay and have gained a wealth of information not only about the Japanese people and their culture but also, about myself. I have found the staff and students of this study group diligent and with purpose and would like at this point to wish them all the very best in everything they undertake. I can assure you friends that we at W.C.C. we always be with you in spirit and I hope that we shall keep in touch so that, we may exchange information and ideas with each other. Here's to all of you at Kobe College.

Christine H. S. A. Marley

Student of W.C.C., India

資料・図書をご利用下さい

女性学インスティテュートでは、女性学関係の図書および定期刊行物、新聞切り抜き、ビデオ、講演会のテープ、その他の情報、資料を収集、整理し、学生および教職員の方々のご利用をお待ちしています。閲覧と貸し出し希望の方は、D館3階303号までお越し下さい。

月～金 8:30～16:30 (12:00～13:00以外)

ビデオご案内

『変わりゆく女性像』

- ・女は語る (Women Speaking)
- ・性別を問う (Sexual Identity)
- ・男女平等に立った子育て (Raising Sons and Daughters)
- ・性と暴力 (Everyday Violence)

このビデオは英国のオープン・ユニバーシティの正規の講座として、BBCにより製作、放映された作品です。

WOMEN AND THEIR IMAGES: A Congratulatory Message

Catherine Broderick

Freud is not the only one who has wondered "What do women want?" Women's Studies, while disagreeing with most of Freud's views on women, has re-echoed and, indeed, tried to emphasize this particular question because it seems that "What do men want of women?" has for too

long had more power over women's actions.

This power is reflected in the recent "Japan boom" in Europe and North America which has focused on the "second-class-citizen" status of Japanese women. The title of Jane Condon's recent book, reviewed in *Time* magazine, *A Half Step Behind: Japanese Women of the '80s*, reflects the general mood of reportage echoed in a recent Wall Street Journal article on Japanese women who have difficulty refitting into a culture repressive to them.

What do Japanese women think of their image abroad these days? It is heartening to see that Japanese women of vision, aided by men of good will, are beginning to look at themselves seriously, to take the study of women seriously. It is heartening to see a Women's Studies Institute in a Japanese women's college working actively to expand this vision and increase this good will. The vigorous activity of the Kobe College Institute for Women's Studies can be part of an awakening to awareness of the Japanese woman to who she has been, who she is and who she can be.

The Institute can begin working toward these goals in several ways. By being a force for re-education it could be an effective means of opening the doors and windows of information about women as positive, active, equal, and respected members of society. How about a substantial and prestigious prize for the best essay on women by an undergraduate student each year?

By being aware of women in society the Institute could lead the campus in monitoring the images of women that publicly issue from it. How are women portrayed in the PR campaigns of the college? The recent publicity pamphlet, Kobe College 1987, is a case in point: why are Japanese women so conspicuously absent from any pictures showing women in positions of authority, leadership, or scholarship? Why isn't the Institute part of the pamphlet? How are women shown in the questions on the Entrance Exams--as traditionally helpless or conspicuously absent, or as participating members of society?

By being a database the Institute's book, journal and video holdings could be integrated into the library as part of the card catalog with a notation indicating where they are to be found. Students could thus be made aware of the resources open to them. As a fertile garden for the study and development of women who will enrich society in their turn, The Kobe College institute for Women's Studies is a real step forward in women's education!

女性学インスティテュートに期待する

別府 恵子

わが神戸女学院大学に、女性学インスティテュートなる研究機関が設立されて、2年目を迎える。その間、女性学の先駆者たちによる講演会が何回か企画された。私も研究機関の一員として、それらの講演から色々と啓蒙され、触発されることが多かった。が、講演会のほかには特別の活動もなしにすぎた1年である。勿論、1年目は準備期間であったのだから、それも致し方ないだろう。問題は今後の研究活動をどう発展させていくかということである。そして、それが女学院大学の将来とどう関わっていくかということだろう。

当然のことながら、女性学という以上、学門の一分野であって、われわれの関心はおよそ政治的性格を持つものでない。しかし女性学の発生が、従来の価値体系を根底から見直すことにあったのなら、女性学にたずさわることは、ある社会的姿勢を期待されて然るべきでなかろうか。21世紀の社会において、女性がどういう役割を果すかということにおいて、女子大学である女学院の使命は大きいといえよう。私たちの先輩たちが、かつて日本の近代化に重要な任を負ったように。そうした理念はさておき、現実の問題として何をしたら良いのだろうか。

女性学インスティテュート設立2周年にあたる本年度には、機関誌の発行が予定され、準備が進んでいる。それと同時に「女性学」の総合講座を開いてはどうだろうか。この春休みのある週末、私学共済が経営する大阪ガーデンパレスで、英文学科は「カリキュラム検討セミナー」を行った。英文学科のカリキュラムを、より良くするために種々の意見が出されたのであるが、そのうちのひとつに、「Women's Studies」Programを考慮してはという提案があった。具体的な構想は何もまだ出来上がっていないが、すでに開設されている総合講座の一つとして、全学レベルで「女性学」講座の編成をしてはどうだろうか。女性学という新しい研究分野により多くの関心が寄せられることを願って「Women's Studies」Programが真剣に、



"Stop me!"

From *The Seal in the Bedroom* by James Thurber.

やめられない、止まらない……女性学……

そして慎重に考慮されることを期待したい。何故なら女性学インスティテュートは、唯対外的に、機構上体裁を整えるため創始されたのではないのだから。

年報の創刊に向けて

小 関 三 平

岡田山に、やっと、「女性学」のツボミがふくらみはじめた。残念ながら、この土地はあまり肥えていないから、咲くには時間がかかるだろう。あでやかな色か、くすんだ色か、それはわからない。

だが、岡本院長によって播かれたタネが、何年もかかってようやく、ツボミをもたらすまでに、成長した。あちこちから足を引っ張られながらも、壮年期の14年を、この岡田山遊園整備のために埋められた、院長の、新たな功績の一つである。

その意を体した池井元研究所長から、第一期園丁の一人に指名された私としても、有機肥料や、毒をふくむ化学肥料のことを、少しは勉強しなければなるまい。

さいわい、同期の園丁仲間つまり編集委員会の同僚(別府・プロデリック・大利の三氏)は、有能・熱心な人たちはばかりだし、万事の調整に心を砕いてくださる黒木さんは、本場仕込みの女性学徒だから、私は、幼児用の小さなジョロで水遊びでもしてれば、いいのである。

ただ、この新しい花の育成・栽培に、はたして「男手」が要るのかどうかは、賛否両論に分れるだろうし、「男だてらに生意気なノ」という陰の声も、あるかもしれない。いや、この栽培そのものに疑惑の目を向けてる、女性たちも、少なくない。

が、ともかく、年報のプランは、三度の編集委員会を経て、ほぼ、できあがった。この「ニュースレター」は、いわば、その前宣伝を兼ねている。

少しはソフトに、と思って、おこがましくも、駄弁を弄した次第である。

活 動 報 告

1985年度の活動報告は、1986年3月14日の学報(No.86)に掲載されているので、ここでは詳細を省略いたします。

1985年度

◎第一回講演会 2月20日

『女性学の現状』 C.プロデリック教授
(神戸女学院大学英文学科)

◎講演会および学生参加の討論会 4月12日

C.ラザレス博士 (United Board for Christian Higher Education in Asiaの女性問題教育主事) 他ゲストを迎えて

◎第二回講演会 7月12日

『比較女性論—東と西の出会い』黒木雅子氏

(女性学インスティテュート職員)

◎第三回講演会 12月17日

『アジアと女性研究』 藤枝澗子教授

(京都精華大学短期学部)

◎AWI交換留学生のうけ入れ

1986年度

◎シンポジウム 5月19日

『留学生からみた日本の女子大生』

司 会：高瀬ふみ子教授(女性学インスティテュートディレクター)

発題者：Miss Katherine Tully Breer (Mount Holyoke College、同志社大学留学 Asian Studies 専攻)

Miss Christine Marley (Women's Christian College, Madras, India, AWI 交換留学生、心理学専攻)

二人の発題者に、彼女たちから見た日本の女子大生については話をしていただき、その後、韓国から神戸女学院大学院に留学中の沈さんを交えて、本学の学生との討論をおこないました。

留学生から、日本の女子学生の結婚志向、親からのプレッシャー、自己主張に欠ける面があるなど指摘され、また職業観のちがいが話題になりました。

◎第一回講演会 5月27日

『女性学のすすめ』 上野千鶴子氏

(平安女学院短期大学助教授)

女性学とは、たんに学問の対象に女性を含むだけでなく、担い手は男女の別を問わない。またこれは、女性のための学ではなく、男女両性学でもある。そしてまず、思いこみや常識の問いなおしから始まる。たとえば、女=家庭 男=仕事という性別役割分担の歴史的起源をさぐることによって、この枠組の組みかえが必要であろう。

■講演会のお知らせ (10月頃)

「女性」に対する社会的まなざし

〈知性〉〈母性〉〈魔性〉—ファンタジーまたはエロスの世界への浮遊

柳原佳子氏 (神戸女学院大学非常勤講師)

年報創刊号の準備すすむ

女性学インスティテュート年報(名称未定)の創刊号が、1987年3月までには発行される予定です。ご期待下さい。

女性学インスティテュート Newsletter 編集委員

別府恵子、C.プロデリック、小関三平、大利一雄(A B C順)

編集発行：神戸女学院大学女性学インスティテュート

〒662 西宮市岡田山4-1

☎(0798)52-0955(代)